

U23a 光子の観測と波動

藤原ケイ

宇宙での多くの現象は光子の観測によって確認されるものであるが、光子そのものに対する理解は十分とは言えない。即ち あやふやな光子像で宇宙像・宇宙論が組み立てられている、ということになる。筆者はこの状況の改善に向けて、光子を含む全ての物質の新たな構造モデルを提案し、その一部として光子の挙動について議論している。

<2020 秋>新物質モデル（含む 光子）発案。 ”光子の減衰=赤方偏移”

<2021 春>新光子モデルで反射・屈折・干渉等の基礎的な挙動を解釈。 ”致命的な齟齬は無い”

<2022 春>新光子モデルからの宇宙像など。 ”宇宙 は膨張していない”

これまでの検討では、新モデルに欠陥は見当たらず、推測できる宇宙像等は通説と大きく異なるがより合理的に見える。

今回は 光子の波動と観測を取り上げる。

現代物理学では”光子は粒子であり、波動でもある”とされるが、新光子モデルでは”直線*”であり、波動性を持ってない。結論的に言えば 波動は光子がつくる二次的な現象であり、光子が観測などで消滅する時、周囲の物質を振動させるが、この振動を光子の波動と勘違いしている、ということである。観測しているのは振動である。この確認と、光子の物質からの生成・消滅過程および再生成過程の議論に繋げたい。

*”直線”：光子は直線状の ”プラス/マイナス始粒の交互配列・二重鎖の自力運動体”。

長さがエネルギーで、”自力運動”に伴う長さ減少が ”赤方偏移”。